

いわき市平菅波地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 大豆の収量・品質の安定を図り、規模拡大を実現する。
- 地域の合意形成を図り、栽培体系の確立、ブロックローテーションを適切に実施するとともに、農用地の利用集積と大豆の作付拡大を実現する。
- 大豆導入による収益状況を明らかにし、地域に波及させるためのモデルケースとして活用する。



2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】水稲：17.0ha（内飼料用米5ha）、小麦：1.2ha、大豆：無し（R3）
20.0ha（内飼料用米7ha）、小麦：1.0ha、大豆：0.6ha（R5）
- 基盤整備要望地区で、2年3作のブロックローテーション（水稲→小麦→大豆、など）を目指して、R3より麦、R4より大豆の生産を開始したが、ほ場の区画が小さく、広域に点在しているため、水稲・大豆作の作業遅れ（特に播種作業の遅れ）が常態化。
- R8実施予定の基盤整備事業後に、大豆・麦類の作付割合を拡大する予定。



3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<モデル地区支援チームの設置と需要に応じた生産の検討>

- いわき市、JA、土地改良区、農業振興公社、農林事務所によるモデル地区支援チームを結成。
- 現在は生産物をJAに出荷しており、今後は実需者との連携支援を検討。

<大豆の適期播種実現に向けた取組支援>

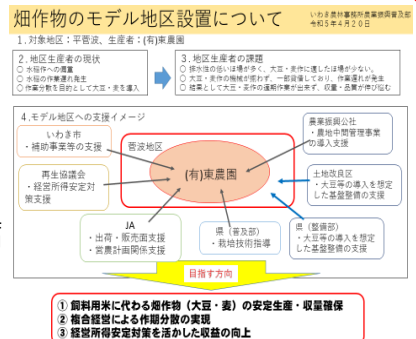
- 水稲と大豆の作業スケジュール見直しと現状実施可能な6月20日付近播種による技術向上の支援。
- 基盤整備後の作付拡大推進と適期播種の実現に向けての支援。



4 取組成果

<関係機関団体との連携と支援体制の整備>

- モデル地区の支援チームで打合せ等による情報共有を図り、生産者の抱える課題や不安（隣接ほ場へのドリフト、ほ場の排水不良、基盤整備地区における大豆拡大への理解、等）を共有。
- 畑作物生産の推進のために、農地中間管理事業による団地化、排水対策を考慮した基盤整備、飼料用米から大豆生産への転換、地元豆腐店と連携した六次化について検討。



<作業スケジュールの改善>

- 晩播体系による収量性の向上について打合せを重ねてきたことで、生産者の作業スケジュールの改善が見られ、6月下旬の播種が可能となった。

5 課題（6年度のポイント）

- 令和5年産大豆は、6月中旬の大雨によるほ場の排水不良等の影響で、7月中旬以降の播種となり、収量が5kg/10aと目標（100kg/10a）を達成できなかった。令和6年産では、**排水性の高いほ場の選択や明渠による排水対策の技術支援に取り組み**、担い手の大豆栽培の技術向上を目指す。さらに、スケジュール改善に向けた支援を継続して行い、適期播種の実現を目指す。